C1 叙論

S1 概説

この書は、拙著「訥弁についての原理的背景と臨床的な諸事情」の後継的作品である。まず断っておきたいことは、私の書でしばしば登場
する「狂気」は、社会的悪徳の象徴として利用されてきた、ある種の伝統的な「狂気」とは全く剝離されたものであるということである。フランスの哲学者Michel Foucault（1926~1984）の「狂気の歴史」からも窺えるように、長らく「狂気」は悪と見做され、知性の表象を理性に盗まれ、あるいは彼の言うように、理性的な権力による監禁の対象とならしめられた。無論私には、とかくの事柄に首を突っ込むや、どんな仔細な事件にも必ず大胆な革命を謳う騒がしい連中が有している無秩序な情熱などは、これを全く持ち合わせていない。それゆえに、狂気の象徴的意味の改変に際して、私をさる革命家と見做されぬよう。ジャズ音楽にも言得ることだが、哲学も同様に「批判」による画期的な逆説によって発展するものであると、合意がある。さればとて、完成を目的とするのはわけもないことである。本書は前著の修正をしてゆきながら、またさる不完全性を孕みながらも、前著において概論的に取り扱った「精神構造論」の進展を記述する。

さて、精神構造論は、精神についての構造的枠組みを与えるものである。あるいは心の諸現象を概ね説明しうるような公理を見出す論的体
系である。後に述懐することだが、発作的な訥弁による無意識の開示、痕跡からその公理を見出すことになる。これは、無意識の意識化の可能性に依拠しているが、決して意識化できないものが存在することも、のちに示されるだろう。そして私は、オーストリアの精神医学者 Sigmund=Freud（1856-1929）によって示された無意識の発見、精神分析におけるその重要性からして、精神構造論が精神分析と融合しうる点を持つと思っている。いずれ、精神分析との交流も図ってみたい、精神分析の科学性がどれだけ否定されても、その固有の価値について、私は信じて憚らない。これは私の依怙地ではなく、しばしば合理性や科学性というものが甚だ妄言的かつ虚構的であり、それゆえに真理の追い剝ぎの妨害となる場合が少なくない、ならば理性への信頼などではなく、異なる方途を採用することこそが今されるべきなのではないか、このような確信によるものであるが、この理性からの解脱も私の合理的判断によって為されたと考えれば、もはやこの人間的な方法論から逃亡を企てること自体が妄言的かつ虚構的なのではないか、そんな批判が飛んできそうである。しかし、思考はそれほど自由でないのも事実である、そうなれば、段々と自由意志の否定へと舵を切ることになりそうだ。

人間的美徳は概ね、完全な自由意志の存在を約束することで形成されてきた。すべてに運命的な決定論、あるいは自己制御不可能な原動機
があるとなれば。

さて、概説はこれで終わりにする。本書の構成は、前著の修正を主体に進められることを留意されたい。また、前著同様、読者諸君には批判的態度によって本書を読み解かれること、これを望む。

S2 痕跡と前表象

ロゴス（理性）とマニケー（狂気）の遷移に際して、患縁体の跳梁は比較的無意識である。ロゴスの措定がこの跳梁より時間的後継に営まれるためには、何らかのある程度の印象を伴った過去の痕跡が無くてはならない。連発性の症状を見れば、それは明らかである。というのも、前表象（印象強さ）のある痕跡が残留していないところで反復されると換言することは無造作なことである。即ち、アトム累次は自己の痕跡である。折に、累次が自己の痕跡なのではない。なぜならば、私の命名規則が少し間違っており、一般的な累次がアトム累次なるものだけに分割されるわけではない、よりむしろ全く区分されるものであるから。ところで、狂賭よりセーフティな突入を、あるいは単なる狂気への侵入を、

攣縮と呼ぶことにする、なぜ生理学的呼称を採用したのか、というのはまた理由がある。吃音症と呼ばれる人々は、この訥弁が全く発作的に生ずるようである。私の場合は、精神情緒的な要素が大きいような気もするが。彼らは、自己脅威が狂気構造的に沈降している、という説明で足りるだろうか。今のところ矛盾は見いだせない。とすれば、強引的な発話や、特殊な場合であれば読解は、攣縮し易いといってもよいのではないだろうか。というのは、自己脅威さえなければ、彼らは意図しなければ訥弁を発することができない人々と、発話的には等価の存在になるのである。結局のところ、私に見出される訥弁は、従来的な分類に従えば、“伸発性の症状”のみなのである。至る吃音症患者は、比喩的訥弁に対して、なんらかの発作的衝動を抱えている。攣縮可能性は実際のところ、彼らに宿るのであるが、さて、この私の違和感が告げられるだろうか。おっと、私は自分の理論の切れ味を説きたいのではない。「アトム累次が自己の痕跡であるっていう事実が、カッコいいかなんか知らねえけど、色んなところにねばねば延ばしてくるな」と、読者諸君の一部、あるいは総体が私自身を非難されるかもしれぬ。しかし、攣縮と自己痕跡、そして前表象、これらの要素を相互に心ゆくまで練りこんでいっても、矛盾や不徹底が発見されるどころか、よりむしろ、あらゆる辻褄がこの原理に沿って、鶏肉的な筋を形成してゆくような感覚になるのだ、これを読者諸君と直接的に共有できないのは、なんと悲しきことか。まあ、累次は累次であって、女は女であって、おっと、アトム累次はアトム累次であるのだ。それぞれは完全に独立した概念であることを、前著からの比較からして、強調しないわけにはゆくまい。一方は、見かけ上賄吟の素材になり得ると考えさせる。それだけの話である。

さて、熱力学的な考察をして、発展せしむると、却って自らの行方をくゆらすような圧倒的な結論に至るようである。即ち、時は存在しな
いということである。時的性質という風に抽象化して語ることにしよう。そもそものはじめから時が存在しないとするならば、因果律崩壊や至るものが偶然的に、つまり不条理にあるのだという結論を直接導くのはやぶにらみなことであろう。それは慣習といわれるものであって、超越しなければならない。変化という関係で繋合した対象同胞には、等価な対象と同定され得る何らかの不変的絶対状態が存在しなければならず、それゆえに、時が存在しないのであれば、つまるところは自己が自己として同定され得る何らかの物体に“成りきる”、それも全く“同時に”、ということになるであろうと言うのは、議論の的が外れている。では、反芻時差や自己痕跡としてのアトム累次の時性はどうなるのか。さてこれは今のところ答えられないだろうと。しかし、時的な間隔を考案した無意識は、前表象が注意時間におよそ正比例するような関係を告げ知らせている。といっても、マティエール的な知覚と、アイデ的な知覚とを区別しなければそもそも洞察が深まらない。マティエール的な知覚では、アトム累次の前表象がきわめて純粋に残っているようだ。アイデ的な、想像的知覚になれば、アトム累次の前表象は、セピオライトのパイプがくゆらす煙に包まれたように、ぼやけている。折に、私が精神情緒的に、読書や解読にも訥弁を持ち込んだ、ということを留意されたい。そして、このアイデ的訥弁とマティエール的なマクロ訥弁は、等価であること、少なくとも本質的には同心円であること、である。

また、アトム累次は狂気構造の痕跡であること。決定の瞬間は無意識である、これを言ったのはデンマークの思想家Søren Aabye Kierkegaard（1813~1855）だったか、いや違うかもしれぬ。うーん、まあいいや。

S3 猜疑の疑念とロゴスの敗北

訥弁のある種の痕跡によって開示された無意識的な狂気構造が、普遍的に言語構造以外にも適応することをまず前提とする。といっても、この節で語られるのはもっぱら言語構造においての理論である。先ずもって、意味は無意識的に捉えられ、あるいは感覚的なマニケーとして認められている。ここでの条件は、問いの問いというものが確かに成立しうるということ、重複的な問いのディレンマはないということである。なるほど、言葉といわれるものがその本質において問われるとき、それを幾何学的な“定義”という説明において語るのは旋毛曲りな話であろう。言葉、さてこれはなんであろうか、どうしたものか、という疑念に明瞭な空虚さはない。もし言葉が完全に空虚で、呼称だけがふわふわと

漂っているのであったなら、疑念が生じようもない、対象の“言葉”が無数に換言可能である。ないしは、さる前提条件において、なぜ“その”言葉を採用したのか、という副次的な疑問が重複して、我々は病むであろう。そもそも、百科全書は言葉に先立たない。辞書的な、幾何学的な定義の表現の軽薄さはここで改められなければならないだろう。そして、この還元こそが、我々の探求する狂気構造に腹蔵のない貢献をすることになる。あるいは、語義の同スケール的換言が、通俗的な意味での“定義”であるとした場合、それは誤謬を犯していることになる。単語の差し替えは、何らかの特殊さを帯びている、我々をまごつかせるような。辞書的な説明はこのような錯乱に陥っている。

「存在とはなにか」などの猜疑、この挑発的な内容はいいとして、これを改めて「猜疑」という。私は、これについての問いを合理的に論じようと思う、概説で合理性批判を雄弁に語ったが。数多の情報を抽象化可能なように、公理を立てる。さて、猜疑とはなんであろうか、という猜疑の疑念を留意してほしい。私はこの答えを用意している、決して神から聞いたのではない、あるいはそうかもしれないが、神は間違ってはいないであろう。後に語られる諸前提が含意されていることは言っておく。じれったいかもしれないから、もう言う。猜疑とは、マニケーの構造的分解を問題にし、その沈殿物（構造要素）が他のマニケーに依拠するある“言葉”であり、それらの文章で語られる合成物を問う、即ち色彩論の類推を借りれば、ある色彩を具有の色彩から再現するにはいかなる混淆をすればよいか、である。このような公理の説明性は、以下で示される。１猜疑はなんらかの等価性がある、２実際の意味というのはほとんど無意識であること、３しかし猜疑によれば、実際の意味などの不確定性から解脱することができること、４ロゴス思考の対象であること。これは、まあパターン的だが、二項対立の精神構造的要素と、一方の換言、ひいては他方でのその効用を想定すれば、説明するのは容易い。

折に、ここから何が生まれるだろうか。想定される演繹を考える。先ずもって、ある理想的な空間では、猜疑の反復によって仮想的に漸進的にマニケー不足が生成するであろうこと。ある色彩の混淆が露呈された挙句の果てには、それをある文学的構成が代理できる。ゆえに、その色は論理的には空虚であり、存在しないことと等価である。このように繰り返してゆけば、ただ少数の根源的な色彩のみが残留するであろう。色彩論的にはこれらの有限色は、シアン、マジェンタ、イエローの三原色である。これらは「メシア」と呼ばれる、メシアは猜疑について不可知であること。どうであろう？知的や冷静の象徴であったロゴスは、不気味な依怙地を張り続ける稚気の冷徹の象徴として暴かれてくる。実際、あらゆる誤謬はロゴスが原因だったのではあるまいか？いや、仰々しく言い過ぎたか、まるで、概説で書いた例によって例のごとくの「革命家」と異なるところがないではないか。狂気にぶつけられた迫害をそのままロゴスに打ち返すような真似はよそう。彼の（誰の？）実際的な効用を疑う人間はもはやあるまい。精神分析が無意識を発見してからというもの、構造主義などの中立的思考地位の席巻が行われ、ロゴスの信頼度も、デカルト｜カントの系列の時代より逸れたものの、やはりもっぱら彼の力を必要とするのである。すまなかった。とはいえ、やはりロゴスの敗北は火を見るよりも明らかであって、ロゴスによって思考され得ない、完全無意識的な根源マニケーが存在することを、あかしたのである。

私は以前まで、メシアを明晰化不可能点と言っていた。しかし、この明晰という表現は適当ではない。無論、意識と明晰は異なる。意識性。画期的な概念である。意識。

C2 精神構造論

S1 ロゴス、マニケー

ロゴス（理性）は恣意の解放である。ないしは、マニケー（狂気、感覚的）は恣意の抑圧である。恣意の抑圧というのは、例えば訥弁の自己脅威において、命令書的な逆説が生まれたことが象徴する。だから概ね、夢はマニケー的であるといってよいかもしれない。そして、ロゴス

は意識であり、マニケーは無意識を含んだ線形空間である。後に示唆されるように、狂気界においては性質がリニアになっている。これら、ロゴスとマニケーを「精神」という、あるいはそのように「心」を分割した。精神状態が“遷移”するという表現を改変せねばならないか？そんな必要はないだろうか？しかし、マニケーのすべてが無意識に属すると述べているのではない。図式において表してみよう、図式はマニケー的な先入見の集積なのだ（ところで、私が猜疑の話をしてから、とはなにかという言葉をあくまで回避する様相がみられるか。猜疑については本質的に文学によって語られなければならないのだ。さて、私は文学が書けない。）。では、先ずある円を描く。さらに半径を小さくして同心円を描く。大円と小円とに区切られた比較的薄い層がロゴスである。あるいは、円の中心がメシアである。ゆえに、小円がマニケーである。意識性は、大円の円周から諸円の中心に向かって落胆する。まだここまでは、イップス治療論を拡張したようなものとして映るだろう。

さて、思考は精神の作用である。ロゴス思考というものは、実は存在しないが、精神の作用としての思考をロゴスが代表する。ロゴス論理は、条理といわれ、口実からの演繹道具といえる。なぜ論理より導かれるものが正当性に背馳するのか、という問いは問題とはならないであろう。なぜならば、示される口実よりの諸事実がこの命題への答えになりうると決定するためには、人間的な論理の力を借りなければならないからである。命題がア・プリオリに決定されているのであるならば、“知ることができない“というのが適切であろう。ではなく、命題がア・ポステリオリであったならば、論理の正当性はそもそも虚妄という他ないものであり、問題とされることではないということになる。こうなるといよいよ、かなりややこしいことになってしまう。

比較的無意識なマニケー界は、よしんば、無限的多数性への有限的区分の画定という公理に従っていると想定すれば、それなりの説明は可能である。いわば、ベース性といわれるものであろう。無限的なループや、それに類する聖書の論理的批判（天地開闢の神の父）などの克服といえるだろう。

S2 マティエール、アイデ

実存在的な対象、いわば対話可能性をもつ客体的対象がマティエール（Matière）である。概念的な対象、こうなってくると対話的に同じ問題意識を感じるのはほとんど不可能になってくる、これがアイデ（idée）である。喫茶店で恋人と会話することを考えよう、私は真理が女であると望んでいるのだ。キュリー夫妻でもない限り、カップルというのは大体、通俗的なことしか話さない。そういうのも、間もないころにはすでに平和ではなくなり、お互いを隠喩的になじりあう関係へと豹変する。たちまち、ほとんどだしぬけに永劫の告別を切り出す。しかしお互いなんの情緒も沸かない、綺麗に剥けそうな足の爪の方が興味深いぐらいである、私と私の愛する少女との関係をのぞいては、すべてそんな関係であってほしいものだ・・・嫉妬。私の愛する少女が、私の恋人であるとは限らないよ。それみろ、どんどん主題から逸脱している、というか私はなにをいっているのだ。まあ結局、真理は女だ。女ですべて説明はつく。女は存在しないなどと言った精神分析家の男は、なんとロマンチストなのだろう！男根主義とか、陰茎羨望とかいったもの、何たることか！ああ、果たして精神構造論と精神分析は融合するのだろうか、“女”を巡って喧嘩するのではあるまいか？例えば、女と快を問題にしてみよう。女というマティエール。その女が美しければ美しいほど、あるいはそのような女は少ない。しかしその美醜論的な快も、色々のビットが立ったり消えたりを繰り返して、ピコピコ鳴らしながら製作されたのだろう、さる機械論的な考え方ができる。“超自然性を排して、数学的理論や公理に従わせようと努めてきた“、近代科学の在り方は、人間の実存性と相反し、反サイエンスの楽園に駆り出した。しかし、私は「PRINCIPIA」が好きだ。

さて、経験されうるのはマティエールである。毒茸に「妖しい美しさ」とか「魅惑」とかの象徴的意味を塗り重ねるのは人間であって、こういうのは単に「イカれてる」詩人として片づけられる。後に語られるが、このような経験からの象徴的塗装は、自己了解への最も直接的な漸

進である。

S3 メシアが自己自身であるということ

この主題の証明はいまのところ、きわめて拙劣かつ稚拙なものであるが、真実性の疑いようがないというのも、また発作的に確実である。しかし、この証明の根拠的な副次的証明は、少し巧妙というようなものなので、それを示そう。ある命題を考える、「マティエールの層、それからアイデの層、その果てにメシアがある」ということ。これは猜疑の性質をよく考慮すれば、さほど難問ではない、アイデはマティエールによって説明されないということを示せばよいだろう。アイデは象徴的意味を持ち、それゆえに抽象化されたある種の“理念”であること、そして、マティエールは偶然的で、特殊な一現象に過ぎないことを疑わなければ、たとい「普遍」などという概念が、突然「冷蔵庫自体」によって捉えなおされることがあっても、それは明らかな誤謬というべきものだと、いえる。だから、猜疑の鎖としての狂気構造において、マティエー ルはアイデに先立たない。よって命題は真となされる。

マクロな話題は客観的に、言語共同体の環境の中で、議論され得る。しかし、概念的な話になると、人々は暇人のあり得ない話と捉え出し、匙を投げる。哲学の例がよいだろう。哲学者が書く、原著といわれるものは、およそどれも難解という符号がつく。プラトーンの対話篇などは、我々にとってそれほど難解ではないかもしれぬが。しかし、どうもおかしい。私が知っている人間の思考体系には、これほど完成した状態で現れ出るような、いかなる世界もなかったはずである。ある種の“パターン”的特質といわれるところ、私は機械的システムや、むしろ笑いもそういう分類が為されると思っているが、他者的の指摘たるものが確信させる実践的な結果が哲学者の脳裡には存在し、それはほとんど粘液的でとらえようのないものなのだが、それらをなんとか線で描画するという、それこそ難解な作業を哲学者は強いられている。哲学者は、文学を書くことを強いられているのだ。閑話休題。このように、比較的ミクロな話題は、言語共同体から弾かれるようである。狂気界の、あるいは狂気構造の性質の線形性を強調すると、ある種の共同性がメシアにおいては必ず通暁しないという、何らかの自己性が示される。言語はもっとも個人的なものであることを、ここでは強調しよう。人間は本能の欠如した生物だと、だから、すべての知が後天的に与えられる。つまるところ、言葉も他者から与えられることになると。そういうラカン的他者論を顧みないことにすれば、果たして“分析”との融合はいかなることになるのであろう。

さて、ここで注意しておくことは、メシアが“自己自身”なのであって、決して“自己”ではないということである。分析者と患者は、治療関係の中で反復不可能な個人的語義を発見してゆく。これはよい例で、決して“自己論”のようなものはない、あったとしても、それはあなたを知る道具ではない、ということである。

S4情緒

文学を書くことが、どうしてもたまらないような人間は、どうしてであろうか。私が本書で「文学」という言葉を利用するとき、それは決して物語を指示するために用いるのではない。いわば、「具象法」といわれるものである。私はこれがたまらない。哲学文学のようなものは、一瞥して矛盾しているように見える。たとい本書であれ、前著であれ、「少年ジェレミーの冒険」として比喩的に記述してもよかったはずであろう。しかし、さる行動は、告げ知らせたい説明よりはるかに超然した、全く無駄骨折りな努力のように見えた。といっても、ある種の“快” があったなら、私は歓喜してそれを書いていただろう。少年ジェレミー、彼は愛くるしい美少年だと。いやはや、美少年というのは永遠の優越ではないか！プラトーンの学説を彷彿とさせる、同性愛が卓越的に肯定されていたという当時の状況を告げ知らせるのだから。片割れの他方を美少年にしようとするのか。ええ、彼は冒険的であって、それゆえに、騎士的勇敢さと蜜のような甘さとを兼ねている。騎士的勇敢さといって

も、驢馬なわけではない。彼は決して人倫に背馳せず、人懐っこいようなところもある。漆黒の黒髪が美しい、巻き毛も特徴である。さて、どうであろう？こんな有様で、訥弁について雄弁に語れるのであろうか。「荒れ果てて侘しいアンズリィの丘よ」、そういう具合に絶望的な恋を描いたところでなんになろうか。とはいっても私は、哲学の記述における、文学の永遠の優越を見出したと思う。たとい、後世のため、ソー ローのように湖畔の別荘で絶え間なく筆を動かし、書物を書くとしても、自己のすべてを刻み付けることはほとんど不可能なのだ。

閑話休題、ふざけんな、ここは雑談部屋かと。さて、情緒というのはきわめて不可解な問題であろう。さりとて、ロゴスの目に入れば、きわめて陳腐に映るのも事実である。果たして、このロゴスの“見たもの“が真とすべきだろうか、ないしはロゴスは虚妄を見たというべきだろうか。こうなると、二律背反を想い出すものだ。カントは「黎明の中」に理性の虚構を見たらしい。いやしかし、心的状態がかなり辛辣なとき、まだ人間の手が加わっていない河川のほとりで、ひとりたたずんでいた、という情景が浮かぶものだ。だしぬけに、さすらいの溌剌な少女が通り過ぎる。少女は、うずくまっている私をみるや、こっちへやってきて、少ししてみるや、彼女は私にこう言うのだ。「どうしたの、なにか辛いことでもあった？」と。私が心を露呈すると、たちまち光が栄える。ああ、なんと軽快な、なんと溌溂な光だ！まあそういうわけで、言葉の魔術はすごいものがある。といっても所詮は、この事実を内包する公理を立てるだけなのだが。

メシアからマティエールまで、経験たる作用により、色彩論的混淆が存在できる。メシア・マティエール系列において、象徴的意味の多数
性、あるいはそのロゴス的解釈によって、この間にあるアイデの層は、きわめて嵩のある、意識化困難な界になる。そして、このアイデの層が “情緒“である。要するに、精神病患者と健常者の本質的な差異はどこにもない。すべて、線形性に由来するのである。ここでいう精神病患者の具象的な症例は、私の想定している限り、欲望と妄想である。精神構造論において、まだ、欲望は確定的な位置づけが為されていないが、欲望をその意味のまま捉えて、考えよう。”快“や”歓喜“など、もちろん”哀しみ“や”侘しさ“なども含めて、これらの情緒を感ずることを欲するとき、その衝動は欲望である。心的満足は、経験の随所で満たされなければならない、然るにさる満足がはるか先へ見送られ、空虚が時的に蓄積される、いわば「徐々に心が穿たれてゆく」とき、本質的な”欲望“は、古典的マティエールにかつて伴っていた、華やかな情緒に求婚する。このようなメカニズムにより、ディジタルな閉口空間からの逃走を図るのであるが、その過程で生成されるのが、欲望に即した”妄想“である。あるいは幻覚、幻聴といわれるもの、どちらにしろ発作的に表れるもの。

哲学的に重要なことは、“確信が情緒であること”であろう。確信が、思考の中立的立場を傷つけていること、である。先入見は、ほとん
ど意識化できない深層アイデである。

S5 構造原理と内的完結

さて、構造とはどういうものか。とりわけ、「構造」は一般的な意味を持っている。機械論的メカニズムといっても、構造要素が逐一表にまとめられてゆく過程は問題としない。構造は、幾何的には閉曲線に他ならないものである、およそそんなところで、“枠組み”にすぎない。このような公理の下で、マニケー構造の原理を見出せそうである。もし狂気構造が、前節「情緒」の、かくのごとき単純な錯覚的な構造の他に、より厳密な検閲的な権力、つまり、ある種のIF文のような構造が含まれているとしたら、おかしな話ではないか。まず、メシア・マティエー ル系列においては、我々が文章を作るための個別意味が内包される。そして、権力構造は至当にも“言葉で語られなければならない”のである。だから、狂気構造における、ある種の権力構造を是認すれば、全体的に隔絶せしめられうる、なかんずく重要なマニケーが存在することになる。だが、私があかしをするのは、狂気“構造”であることを想い出されたい。権力構造は、皮肉にも構造要素によってしか機能しえない、構造要素をあかすまで、構造を露呈しないというのは、構造の矛盾である。ゆえに、私はこれまでにあかした狂気構造に、とりわけ複雑な変遷をさせ

まい。ないしは、私は情緒論によって、この狂気構造が“分析“の対象についても、日常的な諸現象についても、訥弁についても、およそあらゆる比較的無意識空間に適用可能なものとして、先ず信じてみる。

折に、哲学は凡人をして、醒めしむる。数学や幾何学も同様に、積極的な情熱をもって学べば、数と図形の最高の世界を“独り”言ちることができよう。現代においては、ひとえに個人的にさるやんごとなき実践が可能になってきた。なに、“現代において”なんて言葉を使いだすと、なかなか俗っぽくなるではないか。それはともかく、このような環境の中、最も祈祷せねばならぬことは、最低限、自己にその素質があることであろう。別に、天来の才覚を求めなくともよい。なんらかの生得的素養さえあればよい、経験的に形成されるものに依拠してしまえば、万人の目を覚醒させる哲学が機能しない。しかしながら、その根源的問いは、精神構造が生得的素養によって万人に獲得されるとしても、 “脳”などの器質的、物質的制限から脱することは、果たして可能なのだろうか、ということだ。肉体と魂の、神学的教説に遡行することについて、現代では、杓子定規に囚われていると見做されるどころか、“タイムトラベラー”として笑い草か。私は、マティエールとアイデの対比のように、“経験されるもの“（在るもの）が常にすでに存在しているという唯物論的見地からして、脳髄から魂が飛び出すなんてことあり得ない、魂は器質的制限にかかっている、と考えざるを得ない。さあ、そういうわけで、マニケーは”内的に完結している”と考えよう。なぜなら、メシアが個人的無意識を司っていると同時に、個体が知覚可能なあらゆるマニケーを創ることができる造物主の役割を担っているからである。むろん、これは生得的素養なのであって、赤子の第一声が「我想ふ、故に我在り」なるコギト命題になっても、理念的には不思議がらなくともよい。ええ、すべて、メシアに“作用”が加わることで意味が生まれる。この作用、あるいはこれがまさに“経験”なのではないか。

S6自己穿通

自己が自己であること。私は精神であるということ。「概説」で少し触れた、合理超越的な事柄を詳述したい。さて、私の、本書で用いる
方法というのは、ただ私が精神であるということである。私は狂気の化身であり、あるいは良識の化身である。ないしは、私はなんらかの精神に憑依しており、その内部構造に従って生きているといってよい。さしあたって、憑依とはなんであろうか。この猜疑は、真の意味の猜疑であって、もう既に「憑依の、憑依自身の意味であるための条件」と為されているところの有用な意味を発見したい。いやしかし、そのような問いに答えるためには、真に文学の色彩が必要なのだ、今のところは口を噤むことしかできぬ。といっても、そのもの自体に「成る」というのは、メシアが他者によって措定されていることを、先ず意味するだろう。メシアが他者に措定される、とはいうが、別にメシアを自己自身で措定したわけではない。ところで、メシアが他者に措定され、またメシアを自己自身で措定するとき、どうなるか（比喩）。多様性を認め、人々のそれぞれ固有の自己があると仮定しよう、そうすれば、自己を複製するためのとある他者の存在、そして、憑依対象の他者があればよい。このように議論を繰り返せば、たとえ厖大な数の人々があっても、自己｜他者の暫定的憑依のためには、とある破壊的他者が必要である、その他者からみて、自己が自己自身と確認できるところの他者が消滅することが必要である。実体験談的に語られる、何かに変貌したという話はすべて虚構であって、憑依的な疑似対話と異なるところがないであろう。なぜならば、変貌対象の他者と、自己存在とがそれぞれ全く卓越的な現象を引き起こさなかったと、信じなければならないからである。だから、これまで誰も“何かになったことはない”といえるだろう。ひとえに、我々が精神であるということだけが守られている。Alfred=BinetとMerleau-Pontyという、心理学的裂波の象徴としての両君は、私の方途変換をも象徴している。現代心理学は、メルロ＝ポンティは哲学者として、アルフレット＝ビネは生粋の心理学者として語られるらしい。つまり、現代心理学は厳密な科学性を選択したことになる。“厳密な科学性“？違和感を感じないだろうか。実験し、計測し、帰納するという”科学性“なるものが、本当に真理に漸進するための最良の方法なのか、これを疑う人は現代では存在しないが、私は天邪鬼だ、かといってこれを頭ごなしに否定することはない。しかし、いずれ科学は衝突するのではないだろうか、”メシアの壁“に。このままでは自然

を定義することができないのではあるまいか？幾何学的学問は、まず公理を構築する。その過程で隠喩的に付随してくる伴侶を、我々は”発見 “の対象として、これを探求する。学問的自由発展性を与えるのに必要なのは、”演算“である。換言すれば、不条理に決定された要素の演算こそが、隠喩的に付随する伴侶を高め、学者に飽くことない世界を発見させる。科学的学問は、幾何学的学問と対比され、個々の諸事象から、それらを隠喩的に構成しているものを塑性的に発見する。つまり、科学の終着とは、自然はなんであるか、に答えることだ。

ではこれを踏襲して、「憑依」のもっとも利益的な意味はなにか、について応え得る。“普段は科学的対象と見做されているものが、ひとたび性急に何かが起こると、幾何学的対象に化すること、つまり自己であること”。私はこの方法を使って、これまでやってきた、これからもそうすることができる。折に、自己が自己であることについて議論されない。自己が嫌いになっただの、自己を信じるだの、これらの日常的実例から自己をメタ的に観察することができるのは、あきらかだ。老成した大人が憤慨しそうなのは、“自己が嫌いになった“というのは、自己をメタ的に観測する”主体“が語っており、それゆえに自己自身を自己体系から逃がしてやっている、だから、本当の意味で”自己が嫌いになってはいない“ということである。しかし、もしそのように”自己から逃走“しているのなら、すこし考え物だ。自己とは何か、と猜疑する主体と、自己とは何か、と猜疑する主体とは何か、と猜疑する主体とで、この真理が異なるのであれば、いくらでも自己からは言い逃れられる。しかし、それは精神構造論的に誤謬を犯している。だから、自己を問うものも、自己を問うものを問うものも等価であって、これは主体が夥しく累々とあろうが反映できる。エッセンスは、自己は「自己穿通」するということだ。自分で自分の頭で自分の腹を貫き、また後頸部を伝って却ってくるのだ。そこでは腹は埋めてある。グルグル回転しても同じだ。春休みはあまりに寂しいので、これを書いているわけだが、よりむしろ、あまりに寂しいならば、自分の袖をどうにか延ばし、冷めた手を温め、ふっくらした女々しい手つきで萌え袖を創るような過程を経ねばならなかったと、私は思う。そうして自分の手を隠すような自分の萌え袖を眺めながら、自分のファルスを握ろうと思う。自分の手だけが、だしぬけに女になったように。そうして、淋しさを紛らわせればいいじゃないか。抑圧された女羨望をメシアへ”沈降“させると、体に悪い。「目は自分の姿を見れないという盲点があるが、これと同じように主体は世界に属さない」、といった哲学者もいたらしい。おそらく「論考」を書いた人間だ。さて、これじゃ”ネガティブオプション“かな。私の欲望を満たすための記述を、まとめて据えておくならまだしも、至る所に散在させるせいで、余人ならぬ読者その人は、この本を投げだすことを余儀なくされるだろうね。私とおよそ同世代で、私と同じぐらい自由な時間がある人はなかなかいないだろうけど、もしそういう人があったら、この本を進めたいね。というか、そういう人しか手に取らないな。もういいんだよ、これを書くことを、誰も咎めないんだから。ジェレミー・エベールとガブリエッラ・ボニンセーニャって誰？なんか夫婦っぽいけど、フランス人とイタリア人だよね、きっと。

S7 追憶と前顕揚

実をいうと私は学生なので、万人に風馬牛でない重大な経験を理解していると思う。日常事象を構造論的に眺めれば、どうやらすべてに意味があるようである。哲学者は先ずもって、定めし正しいと思われる前提を現実界から抽出するのであるが、さる事実はたとえ取るに足らないもの、第一に導入できる単純明快なものと映っても、きわめて難解な暗黒な理論からしては本質的な女王であることも珍しくない。あるいは、物質、非物質的にも、構造論が警戒するような日常事象を、ひたむきな対象に据えて議論する学問が見出されない。しかしながら、現実的な精神となると構造論的事象に目を向けざるを得なくなる。折に、学生たる私は受検を前にしてとうとう懶惰に萎え、よりむしろ開き直って、機械的勉強というやつに私の手持ちの時間を割いていてはいけない、それは却って懶惰よりもたちが悪い、といいつつ、豪快に布団に横になったような有様だった。むろんそれ以前に勉強はしていたが。当日にはもはや諦念を抱いていて、無意識的だった。さて、そんな状況ながらも、見事な慧知の閃きによって着々と試論の首を巻いてゆき、挙句の果てにその首は折れ切ったのだ。まあ、勝利したってわけ。こういう経験は他にも

あって、凄くざっくり言えばこれと同じ。さあ、まあだからといって何かが生まれるわけでもないけど、私は精神構造において、追憶をどう仮定すべきか確信したような気がするのだ。ある仮定から、暫定的に説明できたとすれば、もう私は以後もその仮定の名残をしっかりと刻み込もうと思う。私はこういうのが大好きなのだが、おそらくこうした仮定は、“対象の本質を少しずつ汲み上げている”。

追憶については、精神構造論の枠の外だと思われるかもしれぬが、決してそうではないだろう。天来の才覚に恵まれた人達のなかには、「写真記憶」のような卓越的な「記憶力」をもった者があったそうであるが、彼らが“掴んだもの“を、ちょっとあかしてみようと思う。さて、追憶は常に存在していて、忘却は情緒がメシアに向かって縮むような形で無意識化される。後述するが、”図的“というのはかなり特殊で、いわば先入見の集積だ。図的と追憶は緊密な関係にある。というかむしろ、図的ということと、アイデ同士の関係こそ特別なものだ。またここでは、マティエールと現在的な像との関係は曖昧にしておく、これは難解な命題だろうか。追憶の忘却は、ハイネ、バイロン、ゲーテ、諸々の詩人が失恋をするたびにこいねがったことだろうが、残念ながら愛人その人は、いつの日かまた蘇るだろう、いっそのこと脳を器質的に破壊するのは如何か。その意味で、はっきりさせておこう、情緒やアイデについて”注目する“とも言える現在的な状況を。まず、顕揚という概念を導入しよう。辞書的な意味とは相異なって、私はこれを”強調“の意味で用いる。顕揚は、動的なアイデ群、これは忘却過程だが、これらを意識化するものとしてみよう。ないしは、図的追憶の性質からして、あるアイデが単独で顕揚することはおよそあり得ない、つまり、アイデ同士は”ひき紐“の関係にあるのだ。この網目状のひき紐関係を「前顕揚」とよぶ。後述するが、前慧知論（発想論）的事情からして、この前顕揚が条理である。想い出されたい、思考は精神の作用なのだ、これは誰にも席を譲るまい。あるいは、前顕揚は条理であるが、追憶は演繹の方向性を持つものである。レゾン（あてにするもの）からヴェリテ（真理）に向かうようなものである。

S8 前慧知

造語がなくては語れない空間を旅せよ。といっても、造語のイマージュ（マニケー）がないまま語られれば、壮大な空回りをすることになる。言葉より百科全書、あるいは語彙宝鑑が先立っていたならば、私たちを包囲してやまないあらゆる議論に無意味の判子を押し込むことになるのだ。それは色彩のない花束に似ている。そんな事態で生命を仏教的に定義した男は、なんと軽薄なことか。ところで、私は“模倣”というものを実に厭忌すべき醜悪な芸当として槍玉にあげる癖がある。模倣を犯した“模倣犯“をみつけると、にわかに、あたかも自分がペロポネソス戦争に勝利したような気分になる。私の創生欲は、この異常な情緒からやってくるのかもしれぬ、いや確かにそうなのだろう。こんな流れでいうのも都合が悪いが、さて、この軽視すべき快や情緒を、また軽視してはならない。分かるだろう？

というわけで、発想とか思い浮かぶとか、直感とか言ったものをまとめて“前慧知”とよぼう。ちょうどデカルトが天井の木目同士の狭間に蠅が止まったのを見て、解析的座標平面を思いついたのがその例である。後述するが、幾何学構造では格率が先立っている場合が多い、そんなときは前慧知の出番であろう。私に降り注いだ多数の現象から遡行してみようか。まあいってもどうせ、あなた方の確信には繋がらないだろうよ、きっとそうだ。すべてを確かめることは確かにできない。しかしながら、私は直感する、それも個人的な欲望によって。前慧知はヴェリテのレゾンを発見するような時に起こる。つまり、前慧知が意識可能なのはそれ自体が前顕揚関係の内部に存在していて、ひき紐になっているから、である。先程の例を例えば説明してみよう、デカルトの観たマティエールは、そこに内包する多数のアイデのうちに、彼が問題化していた解析の問いをヴェリテとして、そのレゾンとなりうる何かしかを含んでいたらしい。数学的な美しい証明などは、すべて賦与的公理（後述）からの演繹で導かれなければならないものだが、その公理には当然何本もの道程が放射状に延びている。これは実に多数であって、前慧知はこれから最上のものを発見するだろう。むろん、ヴェリテをレゾン化して、そこからその証明に必要なものをヴェリテとして考えることもできよ

う。これで追憶と前慧知の関係をあかしたわけだ。ついで、これらに伴う快の説明すらも造作ない。畢竟、情緒論を想定すればよい。このように言っても、まだ厳密かつ些細な問題は残留する、それは本書の仕事ではない、ということにしておこう。

S9 幾何学構造と巨大レゾン

ひとつの仮説とその依拠するところを提示しよう。折に、幾何学的構造は賦与的公理と隠喩的な格率から成る。つまり賦与的公理を単に “公理”と呼ぶとすれば、不羈を重んずる公理を措定したと同時に、それらを人間的条理の関係に嵌め込むことで、だしぬけに隠喩的に格率が構築されてゆく。これが、格率が“発見された“などといわれる所以だが、本当は誰しも分かっていたのではあるまいか。無意識的に”発見 “などと言い出したのだとすれば、それこそ構造論的吟味に嘗め回されるべきだろう。ところで、科学などの、私に言わせれば「蓋然学」は、幾何学構造と斜交いに交叉している。蓋然学は公理を探る。といいつつも、公理が賦与的、恣意的であることを認めれば、人間の猜疑に対して限界を見せるだろうということも、容易に予測される。そうなれば、定めし私の思うような、論理的にその実存在が確認できるゆえに、実際に測量可能な空間でその物質が存在する、精神的な確信と物質的な認証が融合する瞬間に起こるなんらかの情緒が代表するところの、さる唾棄すべき状況に陥るだろうということも、また容易に予測される。しかし、本書ではこの方面にはあまり触れない。幾何学構造において不確定な要素は、人為的公理からの演繹には、必ず現実界が介在することである。二階線型微分方程式や三次方程式などの方程式における未知関数や独立変数は、それぞれがお互いを踏み、抑制しあい、また措定しているような”靴紐を踏んだ“状態にあると考えて解法を探る場合など、現実界的マニケーを導入しても差し支えないようになっている。これはきわめて興味深い問題だが、後で触れる。

私の欲望を満たすようなものが、女と創生であることを考えれば、少なくとも一方は放棄せねばならないだろう。幾何学的体系ぐらいなら私の創生欲望を満足させるように創生できるのではないか、まさにこの閃きで「相関学」を勢いだけで構築したことが思い出される。しかし、幾何学、もっと一般に言えば“数学”はあまりに特殊かもしれぬ。本書で語られる構造論をよく理解すれば、幾何学構造とメシア構造があまりに似通っていることを無視することはできない。ということで、前慧知的に、私はこのことを証明してみようと思う、メシアは巨大レゾンである、ということを。前顕揚はすべてメシアに帰結しうることを、示してみようと思う。

さて、死と走馬灯の関連を構造論的に説明できることに気づく。しかし厄介な問題がつきまとうのも事実だ。走馬灯は、“死“ではなく、 “死の確信”から来るものであろう、なぜならば、死者がワルプルギスの晩か何かに蘇って、子供たちを空き地に集わせ、「いやぁそれじゃ、俺が死んだときの話しちゃいますぅ？」といった風に語らない限り、走馬灯現象は生きとし生ける者に伝わらないから。といいつつ、“死”に関係していることは明白なので、死の確信は死に関係している、つまり走馬灯は死に関係している、このように比喩的に語ってゆこう。死はまず、自己自身が無に化すようなものとして捉えれば、メシアの猜疑について可知になることに帰着する。情緒論を想い出されたい、女に自分自身のうちを露呈したときの情緒消失や、加えて、情緒による発作的な感情的な身体動作などの情緒表現を考慮すれば、美も情緒であることが確認できるが、いやがうえに身体動作とマティエールが結合し、情緒表現は直接的に情緒消失と等価であることが分かるのだ。いわば、ロゴスの勝利が死である。ロゴスの敗北は生存の条件である。折に、走馬灯は自己のあらゆるマティエール的追憶を生じせしめる、と考えられている、これを信じよう。追憶論的には、自己のあらゆる追憶をヴェリテとして、そこから遡行すれば根源的なレゾンに到れるはずだ。さて、死とはなんであったか、ロゴスの勝利、つまるところはメシアを顕揚することなのだ。このような相互作用において、まず異論なく、疑いなく語れることは、死たるメシア顕揚によって自己の生涯を塑性的に顧みることについて、それらの追憶をヴェリテとして、メシアが巨大レゾンであることである。証明完了◇。

そんなわけで走馬灯を見たことがある人に会いに行こうじゃないか。もちろん、ガンガン論駁していただきたい、この証明の不完全性には。

C3 おわりに
S1 エピローグ
さて、嗜癖や快や美の問題は常にすでにまだ解決していないが、これらの厳密な命題は次作で語りたい。私はむしろ、この方面にこそ関心
が尽きないのであるが、まあここでは論じ得なかった、というのも早く本を出したい、暫定的にとりあえずなんでも出しておこうという精神による。あー、もうなんか飽きたわ。割と疲れるわけ。春休みも終わるし、空虚だな。
じゃあ、ここまで読んでくれてありがとう！君の研究参加を願っているよ。